

建築と景観

浅石 優*

1. 英国の景観デザイン

景観デザインと言えば、ランドスケープガーデンでも有名な英国の都市デザインについて語らねばならないでしょう。かれこれ20年前になりますが、ロンドンに子連れ遊学で一年半滞在していたときに、近所のアレキサンドラロードにカムデンタウン建築局によるハウジングが完成しました。この建物は、打放しコンクリートを主体とした徐々に階が上がるに従ってセットバックする断面をもつ集合住居で平面形が壮大なクレセントになっています。クレセントは古典的英国都市計画における主要な手法の一つですが、とくにバースのロイヤルクレセントのその後に与えた影響力には大きなものがあります。

バースはその名のとおりローマンバースのあるローマ帝国時代の保養地ですが、18世紀になってジョン・ウッド父子が都市計画と建築が一体となった街区をここに造っています(図-1)。

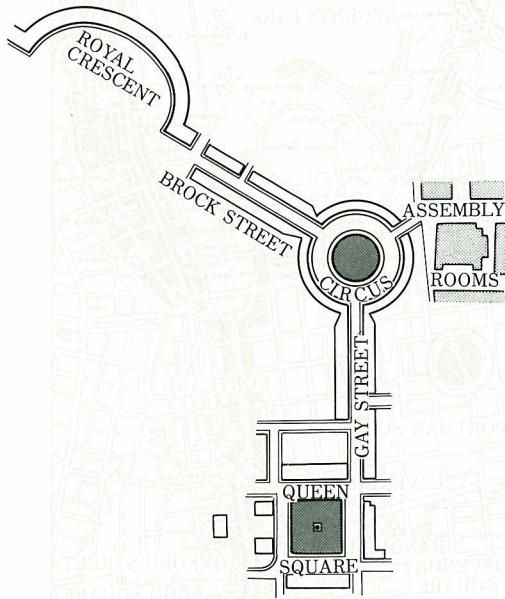


図-1 ジョン・ウッド父子のバース計画

それはクイーンスクエア、ゲイストリート、サーカス、ブロックストリートそしてロイヤルクレセントを組み合わせた構成です(写真-1~4)。クイーンスクエアの北側にはパ

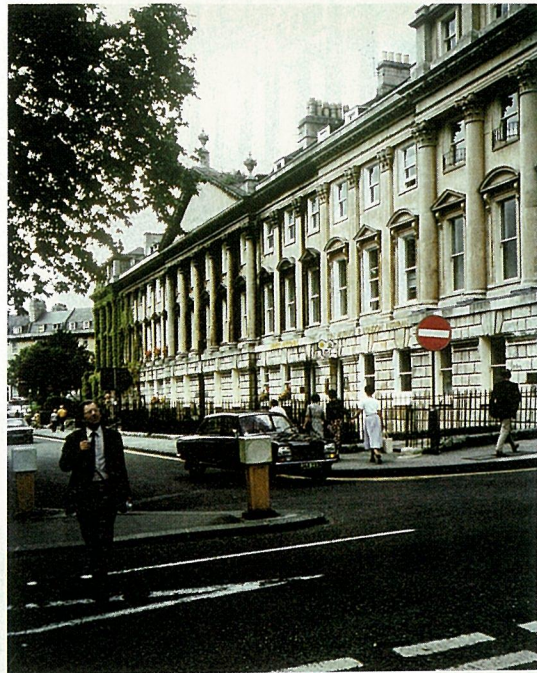


写真-1 クイーンスクエア

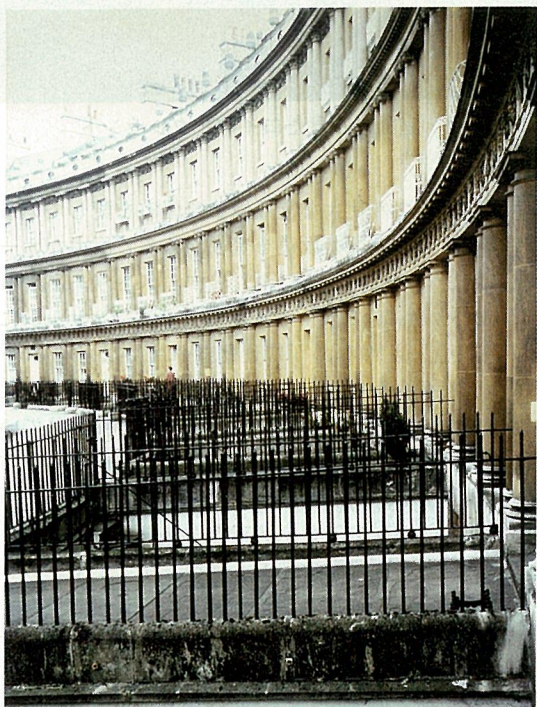


写真-2 サーカス



* Masaru ASAISHI
建築家, (株)日本設計



写真-3 ロイヤルクレセント



写真-4 庭園から見たロイヤルクレセント

ラディアンモチーフの壮大な宮殿風集合住宅を配しています。ゲイストリートの急な坂道を登りつめると巨大なオークが中央に配されたサーカスに至ります。ストリートからのアクセスが3カ所になっていますから、必ずファサードに向かって人が導入されるように仕組みられています。ファサードはドリス、イオニア、コリントの3オーダーを3層に配した構成です。ローマのコロッセオの外側で使われていたモチーフを内側に引用して、ローマ時代の都市のあり方のジョン・ウッドなりの解釈になっています。これら父の業績を引き継いでジョン・ウッド二世はブロックストリートを抜けた小高い南西斜面の丘の上に壮大なロイヤルクレセントを建設しました。父のデザインとは対照的で壮大で大らかな空間を造っていて、その前になだらかに広がる常緑の芝生でカバーされた広大な前庭と調和した美しいランドスケープもたいへん素晴らしいものです。その後、エジンバラの街区構成やジョン・ナッシュのリージェンツスト

リート計画でもこの手法が導入されています。

ジョン・ナッシュは、ジョン・ソーンと並ぶ新古典主義の代表的な建築家で、1811年彼が60歳のときに図-2の黒い部分で示されたリージェンツパークからセントジェームズパークに至るまでの都市計画を担当し、十数年かけて完成させました。1666年のロンドン大火後に、クリストファー・レンは、放射状に軸線の通った都市計画を提案しましたが却下され、これまでどおりの街路に沿って都市が再建されていったことでも分かるように、一直線の道は「ローマ人の造った道」と言われ、英国人の「折れ曲がった道」好きは有名なことです。

ナッシュは、公園からポर्टランドプレイスを抜け、ナッシュのオールソールズ教会を横目に、オックスフォードサーカスを横切り、大きな円弧を描くリージェンツストリートそしてピカデリーサーカス、セントジェームズスクエアを経て、カールトンハウスに面するセントジェームズパークに至るまでの都市建築にピクチャレスクな手法を導入したシークエンスを造り、それによってさまざまな建築・都市的なシーンを造り出しています。

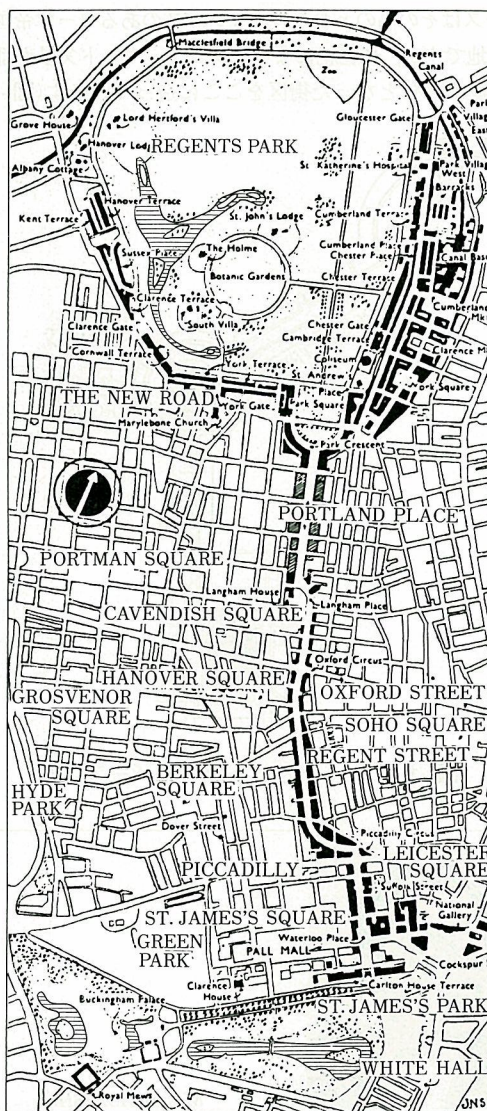


図-2 ジョン・ナッシュのリージェンツストリート計画



写真-5 パーククレセント

リージェンツパーク計画では、通りを少なくし広大な公園を設ける伝統的な英国の都市計画手法に基づいています。そしてバースのサーカスやクレセントそしてテラスハウスを一つの大きな庭園としてまとめる手法を導入した総合的でたいへんオリジナリティーに富んだ計画です。

予定していたサーカスの右半分、イオニア式ツインコラムのコロネードをもつパーククレセントが(写真-5)、まず1812年に始まり、公園東側にはチェスターテラス(写真-6)とカンバーランドテラス(写真-7)、西側にはコーンウェルハウス、ケントハウスなどが建設されていきました。湖と緑豊かな庭園の三方をこれらの白亜の邸宅群が囲み、北側をリージェンツカナルで縁取りすることで、ナッシュのピクチャレスク的構想が実現したことになります。

これら18世紀から19世紀の英国の例は、都市景観を考えるうえで示唆に富んだものですが、ヨーロッパの伝統的、建築文化的背景があること、強い意志と方向性、高度なデザイン能力をもった建築家が全体をまとめていること、単一素材で構成されていること、そして全体のデザインポキャブラリー(この場合は古典主義様式)が統一されていること、などの条件が揃って初めて統一感のある都市景観が成立しているわけです。日本においては、関東大震災後の



写真-6 チェスターテラス



写真-7 カンバーランドテラス

東京大学本郷キャンパスが内田祥三によって計画され、現在のような落ち着いた雰囲気景観となっています。最近では、白紙の状態から作ることのできる広域計画などで、マスターアーキテクトが全体のデザインを統一する中で、複数の建築家がデザインするといった手法を導入する例も多少あります。いずれにしても一見無秩序でカオス状態になっている東京のような既存の都市にこの手法を当てはめることはできません。

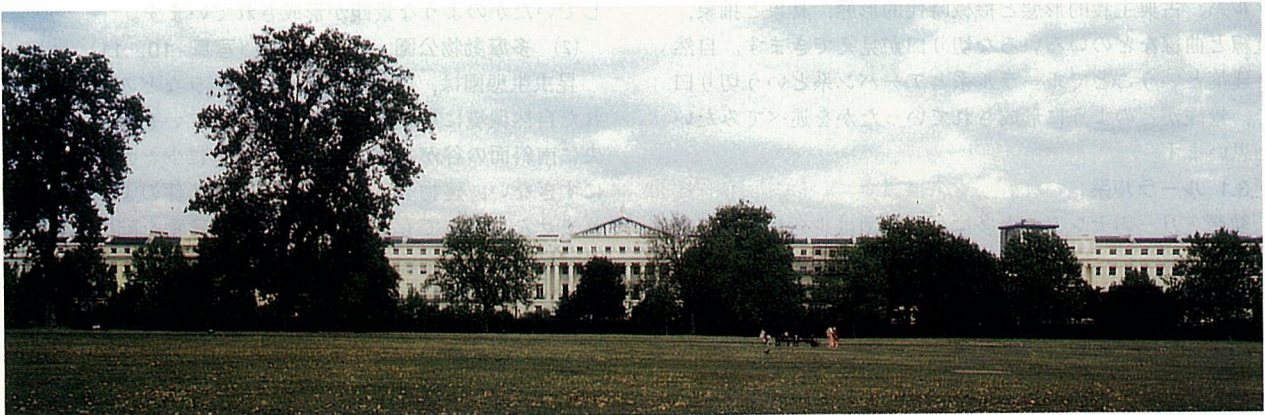


写真-8 庭園から見るカンバーランドテラス

2. 都市は第二の自然

戦後の東京の都市景観は、日本経済の動きに伴って急激な変化をしてきました。私は東京芝浦に生まれ、3歳から23歳までの20年間世田谷の用賀で過ごしました。1947年生まれですから、戦後の貧しい時代から物と情報に溢れる現代までの変化を目の当たりにしています。子供時代の世田谷は田舎で、辺りには田畑が広がりほとんどの道路が未舗装で自然に恵まれた環境でした。用賀から渋谷方面へは、玉川電車(路面電車で現在は地下鉄)が通り、車窓に広がる風景ものどかなもので、夏に渋谷から電車で戻ってくると、体感温度で2、3度は下がったような感じがしました。地下鉄は銀座線しかありませんでしたが、これも地下ということで涼しく感じたものです(まだ地球への環境負荷の少なかった時代)。その後田畑は宅地化され、道路舗装率が上がっていきます。

東京オリンピックを機にドラスティックな変化が起こります。国土や都市のインフラストラクチャーとなる新幹線や首都高速道路などの交通網が整備される中、これまでの日本にはなかった巨大な構築物が都市に出現し、用賀から渋谷に至るこの道も人間のスケールをはるかに超えた道路橋脚や建物によって、まったくこれまでとは異なった風景に変わっていききました。この当時の出版物の都市鳥瞰写真のキャプションには「高速道路が都市に美しさを与えている」などとありますが、アイレベルの風景ではとんでもないことになっていたわけです。

80年代になるとバブル経済の落とし子としての形の表現のみにこだわった自己主張の強いポストモダン建築が現れ、経済の破綻とともに、そこら中に空き地や駐車場が増え、都市が虫喰い状態になっていきました。

こうして変化をし続けていく巨大な生物のような都市は、私のように長い間都市を中心に生活している者にとっては、第二の自然と言ってもよいと思います。

3. ルーラル系とアーバン系

建築景観を考えると、自然(第二の自然も含めたそこにすでにある環境)と建築(そこにこれから造られるもの)との関係のあり方が重要です。私のこれまでの建築のキャリアを眺めてみると、動植物系と人間系、アーバン系とルーラル系、古典主義的形態と機械時代的形態、具象と抽象、直線と曲線などのいろいろな切り口が見えてきます。自然と建築ということでルーラル系とアーバン系という切り口で、景観がどのように形成されていったかを述べてみたいと思います。

3.1 ルーラル系

熱帯ドリームセンターと多摩動物公園はルーラル系の典型です。地形は不定形で高低差があり、何よりも自然が豊かな環境です。このような場所では、現にそこにある自然環境の良いところをベースにそれらと調和共生の方向で思考する必要があります。そこに新しい構築物ができることによって、これまでとは異なったより良い環境になっていかなければなりません。したがって、その場所の特性や場

所が訴えかけてくることを確実に読むことがたいへん重要になってきます。

(1) 熱帯ドリームセンター(写真-9)

熱帯ドリームセンターのある沖縄は亜熱帯地方ですから日照時間、雨量など植物園にとって好条件に恵まれていますが、度重なる台風、冬の季節風そして間近にある海からの潮風などは悪条件になります。しかし、これらの悪条件をポジティブに捉えて問題を解決することで、その場所ならではの新しい建築(景観)が生まれる可能性が出てきます。

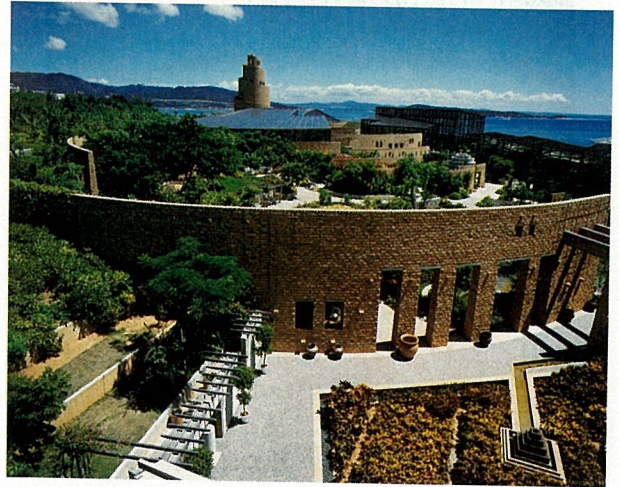


写真-9 熱帯ドリームセンター

穏やかな風を導入しつつ、台風や冬の季節風のような強風を防ぐ防風壁を周辺に巡らし、熱帯植物の生育に相応しい防風エリアを造ることで、厳しい環境のもとで植物園を成立させることができるわけです。通常の植物園であれば、多くの樹木に囲まれた大きな広がりがあり、建物と言えばレストハウスと温室ぐらいのものですが、悪条件によって生まれた防風壁の存在がその景観を一変させています。「昔からジャングルだった所を開墾してみたら、大型のれんがを積んだ円弧を伴った壁が発見され、この遺跡をどのように利用するかを考えた結果、必要とされる温室などの建物を付け加えることによって植物園として再生することになった」というコンセプトです。悠久の時間を経て淘汰され、残るべきもののみ存在する「廃墟」のイメージをベースに全体がデザインされたわけですが、ずっと昔から存在していたかのような景観が形成されています。

(2) 多摩動物公園・昆虫生態園(写真-10, 11)

昆虫生態園は、周辺をクヌギやコナラなどの樹海に囲まれた自然環境に恵まれた場所に位置していますが、敷地中央に南斜面の谷があり、その両サイドに少々平地があるにすぎない、建物を建てるにはあまり条件のよい所ではありません。ここでも悪条件である谷に建物を配置することで、南向きの理想的な温室。夏にあっては南に広がる樹海を渡ってくる涼しい風を導入できる、起伏のある園路で構成されたダイナミックな空間をもつ温室を造ることができました。北側の高い部分にエントランスを配することで、自然で緑豊かな場所に相応しい、その向こうに大空間が存在するとは思えないような小さなスケールの景観とするこ

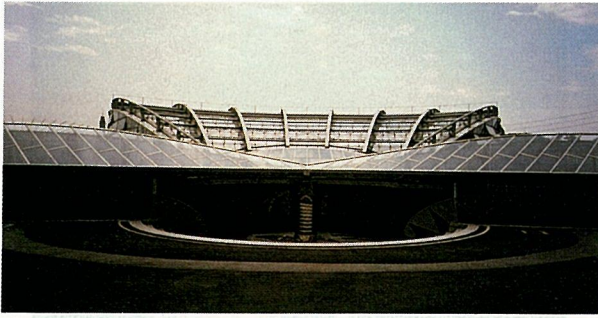


写真-10 スケールを抑えたエントランス



写真-11 内外景観の一体化された大温室

とができました。また大温室は、ガラススクリーンで被覆され、外部に広がる樹海と一体化されたダイナミックな景観になっています。

3.2 アーバン系

富山市庁舎、アクロス福岡、アミュゼ柏は、アーバン系の典型です。これら3つのプロジェクトは、地方都市(第二の自然として、自立したシステムと機能をもった)の中心に位置していて、敷地はそれぞれ都市的なコンテクストをもった場所です。

(1) 富山市庁舎

富山市庁舎は、城址公園、神通川の名残の松川、旧市街そして戦後復興を象徴するシンボルロード(写真-12)などに面した場所にあります。このような敷地条件を背景に、市庁舎の性格としての公共性、ランドマーク性をいかに建築化するか、そして都市景観として周辺の街並との関係のあり方が大きなテーマとなっています。

シンボルロードに面して建っている周辺部の建物は、高さ31mで統一されています。4万3000m²という巨大な建物のボリューム感を減ずるために、行政棟をAB棟に分け、高さを周辺部と同一化する一方、市庁舎のシンボリック形態としての家型の大屋根と、高くそびえ立つ塔が、タウンスケープとしての景観を特徴づけています。公共建築の本来もつ公共性ということに関しては、森、広場、ポケットパークなどの開放的な外部空間そして巨大なアトリウムを連続的に配置し、開放性を強調しています。アトリウムには、各階でオープン廊下を伴った執務空間が面し、AB棟を南北で渡り廊下が繋ぎ、廊下を渡る人々やたたずむ人たちのシルエットが、都市のアクティビティーとして垂直面に



写真-12 シンボルロードから見る富山市庁舎



写真-13 景観としてのアクティビティー

表現されることを意図しました(写真-13)。

(2) アクロス福岡(写真-14~15)

アクロス福岡は、コンサートホール、イベントホール、国際会議場などを中心とした県施設とオフィスや商業施設などの民間施設が巨大なアトリウムで結合された約10万m²の複合施設です。敷地は福岡の中心地県庁跡地で、北西側はオフィス街、東側は薬院新川、南側は天神中央公園に面した場所にあります。この場所は県庁が移転して永らく空き地として存在していて、すでにオープンスペースとしての都市性がそこに根づいていました。そこで敷地南北を結ぶ動線と視線を保存することを意図し、広場の街路的空間を造るために、アトリウムを建物中心に配しました。敷地の南半分を利用して造られた天神中央公園は、福岡都心部のオープンスペースとしては狭すぎます。建物の屋上全体をステップガーデン(階段状の空中庭園)とし、南側の公園を北側敷地全体に引き延ばすことを意図していますが、その景観は緑豊かな天神岳といったところです。北側立面は、ガラスカーテンウォールのファサードで、高さ60mに抑えられた街並に馴染んだ景観となっています。



写真-14 天神中央公園から見るステップガーデン



写真-15 ビジネス街区としての景観

(3) アミュゼ柏 (写真-16)

アミュゼ柏は、公民館、近隣センター、ホールの3つの機能が複合した建物で、駅から数分の所に位置しています。この辺りは商業地域ということで、公共施設と言えども賑わいをもたらさなければなりません。景観的にはこれが一番大事なテーマです。

通りに面している部分には、1階は市民プラザ、展示コーナー、2階は3層吹抜けになったホールホワイエ、シースルーエレベーター、渡り廊下、ダイニングルーム、音楽室、5階は集会室や会議室などが配され、透明なガラスの被膜で覆われています。この重層した立面にさまざまなアクティビティーが表出し、周辺に活気を与えることを意図しています。アクティビティーそのものが、都市の景観にな



写真-16 都市の光がガラススクリーンに映り込む

るといった考えです。

4. グローバルな視点に立った景観デザイン

ルーラル系、アーバン系、いずれにあっても、すでにそこにある環境をベースに、それらとこれから構築される建築との関係のあり方を模索するコンテクスチュアリズムの景観デザインとすることができます。先に触れた英国の例のような強い全体性をもつデザインにはなりません、生き続けている環境を対象に、さらに新しい環境を造るための有効な方法だと思えます。

来年は21世紀。環境の概念がグローバルな広がりを見せる中(誰でも言っていることですが)、土木にしる建築にしる、建設という行為のもたらす地球環境への影響はたいへん大きなものです。環境負荷をいかに減少させるかが大きな課題になっていて、エネルギー放出の少ない、エコロジカルな視点をベースにしたデザインから、今後の新しい景観が生まれてくるように思っています。

【2000年1月31日受付】